

「荻窪の記憶」

こぼればなし

君も雛罌粟われも雛罌粟

この原稿を書いている4月15日現在、桜の花が散って間もないというのに、早くもツツジやフジが満開になり、ウグイスがしきりと大きな声で鳴いています。しかし、私の心も、散歩で出会う人の表情もどこか浮かないのは、コロナウイルスが影を落としているからにほかなりません。このコラムがみなさまのお手元に届くころには、事態が沈静化に向かっていることを願うばかりです。

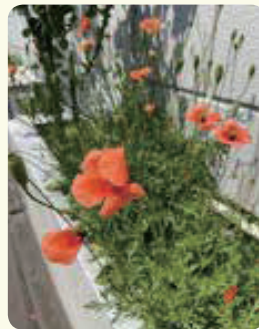
話は変わりますが、春になると気になる路傍の花があります。長い茎の先に咲くオレンジ色の花弁は薄く、どんな微風にも揺れずにはいられません。その可憐な姿にもかかわらず、アスファルトの裂け目にも生えるほど繁殖力が強いことから、外来の迷惑な雑草とされているようです。そんな花が気になりはじめたのは、与謝野晶子の絶唱歌に詠まれた「コクリコ」の仲間らしいと知ったからでした。

さつきフランス
あゝ皐月仏蘭西の野は火の色す
君も雛罌粟われも雛罌粟

「コクリコ」はフランス語で「雛罌粟（ひなげし）」のこと。この歌が、明治から大正に年号が変わった1912年にフランスで詠まれたのには、こんな経緯があります。鉄幹と晶子の結婚から10年、晶子の文名が高まる一方で、鉄幹は主催していた雑誌「明星」の終刊で意気消沈していました。その鉄幹を再生させるため晶子は資金集めに奔走、鉄幹の念願だった渡欧を実現します。しかし、たちまち鉄寛の不在に耐えられなくなり、半年後、7人の子供を置いてパリへと向かいます。二人は恋人気分を取り戻し、各地を旅しますが、そのときにフランスの野を赤く染める

コクリコの群生を見て詠んだのがこの歌です。「火の色」が再燃した二人の愛を象徴しているのはいうまでもないでしょう。

右のヒナゲシの写真は、与謝野公園につづく荻外荘通りで撮影したものです。残念ながら、公園に並ぶ歌碑に雛罌粟（コクリコ）の歌の碑はありませんが、鉄幹がフランスで詠んだ歌が碑に刻まれています。



君と行くノオトル・ダムの塔ばかり
薄桃色にのこれる夕ぐれ

夏に向けて次第に長くなる北の都パリの夕ぐれが目に浮かびます。このとき、鉄寛39歳、晶子34歳。鉄幹に会いたい一心で、単身パリに向かったように、晶子は日本に残して来た子供たちが気になりだすと、いても立ってもいられず、半年足らずの滞欧で、一人帰国します。夫妻が現在の南荻窪に居を構え、11人の子供たちと暮らしはじめたのはその15年後のことです。

ちなみに、1918年から20年にかけてのスペイン風邪の流行では、与謝野家の全員が感染したそうですが、一人も命を落とすことはありませんでした。

「荻窪の記憶」プロジェクト 松井和男

参考文献 「生誕140年 与謝野晶子展」カタログ
県立神奈川近代文学館